

海外日本語教育

かい がい に ほん ご きょう いく

Q & A

このコーナーでは、海外で日本語を教えるときに、教師が直面すると思われる問題をとりあげ、質問に答える形で、読者のみなさんの参考になる情報を提供していきます。

Q 日本で制作・出版された初級用教科書を使って海外で日本語を教える場合には、どのような注意が必要ですか。また、使うときにどのような工夫をすればいいですか。

A 教科書はそれぞれのコースの目的や学習者に合わせて作るのが理想的です。しかし、現実にはいろいろな理由から自分の機関では作らずに、出版されている教科書を買って使うことが多いようです。今回は、日本で制作された初級用日本語教科書を海外の現場に合わせて使うにはどうすればいいか考えてみたいと思います。

日本で作られた教科書の特徴

まず、日本の教科書の特徴をつかんでおきましょう。

対象とする学習者について

普通、日本の教科書は、日本で日本語を学ぶ人々を対象に制作されています。日本での学習者は、日本語を毎日使う機会がありますし、日本の社会・文化についても、基礎的な知識を持っています。また、今後も生活を通していろいろな体験をすることができます。しかし、海外の初級学習者の多くは、教室の外で日本語を使う機会はあまりありません。また、日本へ行ったことのない学習者が多いだろうと思います。

日本語による説明

日本の教科書は、文法解説、練習問題の指示が日本語で書かれていることが多いので、海外における初級前半段階の学習者には負担が重いと思います。

最近では、少数ですが、英語以外の言語（たとえば、中国語、韓国語、タイ語、インドネシア語など）で説明・解説のある教科書も出版されています。

例：海外技術者研修協会編『新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ』
文化外国語専門学校編『文化初級日本語Ⅰ、Ⅱ』

取り上げられている場面

日本で作られた教科書の会話文を見ると、日本での生活や仕事に必要な場面が多く見受けられます。したがって、日本語使用場面が日本とは異なる海外の学習者にとっては、現実的、実際のではない場面もあります。

比較文化的要素

日本の教科書の場合、著者のほとんどは日本人です。日本文化についても日本人の視点から見て、外国人学習者に必要だと思われる要素が選ばれています。一方、海外の日本語を母語としないノンネイティブ教師（以下NNT）やそこに長く住んでいる日本人が作った教科書はその国の文化と日本文化が対照的に述べられているという特徴があります。

図1はニュージーランドの教科書です。自国と日本が対照的に述べられています。



図1 “Getting there in Japanese ~ Land & People ~” (Heinemann Education, 1994年) p.17より

日本人教師用に行っている

日本の教科書は多くの場合、日本人教師（NT）が使うことを前提に作られているので、NNTには使いにくい点があります。たとえば、教師用指導書は、普通、日本語で書かれていますし、説明内容もNT向けなので、NNTには理解しにくいことがあるでしょう。

海外の現場で使う場合の工夫

かいがい げんば つが ばあいい くふう

日本の教科書をNNTが海外で使う際には、いろいろな工夫が必要になります。工夫例をいくつか紹介します。

学習者に親しみやすい地名・人名に置きかえる

がくしゅうしゃ した ちめい じんめい お

文中に出てくる地名・人名などを学習者に身近なものにかえれば、親しみやすくなるでしょう。これは、すでに大勢の先生方が試していることだと思います。

学習者の日本語使用場面を考えて場面設定をする

がくしゅうしゃ にほんご じょうばめん かんが ばめんせつてい

自分の学習者が学校内・学校外のどのような場面で日本語を使うか（学習者の日本語使用場面）を十分に知っておく必要があります。学習者の日本語使用場面（現在と将来の）を考えながら、教科書に出てくる会話の場面設定を自分の学習者に合わせてかえれば、より実際的な会話練習ができるだけでなく、学習意欲をも高めることができます。

☞ 図2は韓国の教科書です。設定場面に注目してください。



図2 『日本語1』（志学社、1996年）p.46-47より

文化についての説明をわかりやすくする

ぶんか せつめい

日本文化に直接触れる機会が少ない海外の学習者に対しては、ことばの背景にある文化の説明をわかりやすくすることが必要です。使用している市販教材に文化的な要素が少ない場合は教師がそれを補うことが必要になります。

☞ 図3はオーストラリアの教科書の文化紹介の例です。

視聴覚教材を効果的に使う

ししょうかくきょうざい こうかてき つが

日本の学習者のように毎日いろいろな言語体験、文化

体験ができないので、それを補うために、教科書のテーマと関係がある視聴覚教材（写真、音声テープ、ビデオなど）を利用して、わかりやすい授業をすることも大切です。

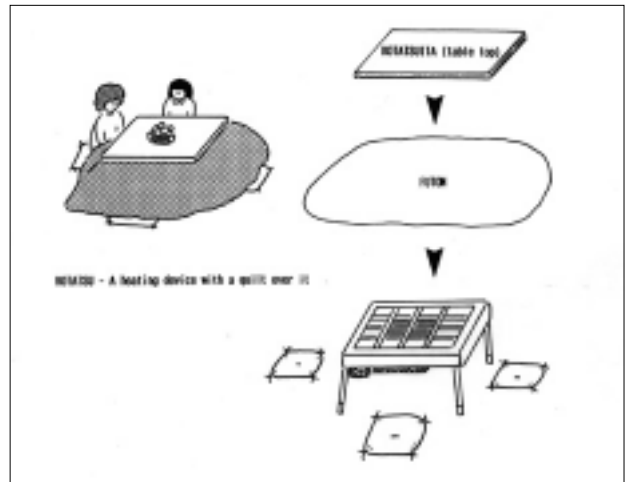


図3 “ISSHONI” (MORETON BAY PUBLISHING、1990年) p.89より

母語・共通語との対照の観点を入れた文法説明をする

ぼご きょうつうご たいしやう かんてん い ぶんぼうせつめい

海外の現場では、学習者の母語・共通語が日本の現場ほど多様ではないので、教師が学習者の母語・共通語と日本語を対照させて説明できるという利点があります。ぜひ、日本語との対照を効果的に行って、わかりやすい文法説明をしてみてください。

対訳付き語彙リストを作る

たいやくつ ごい つく

母語または共通語の「対訳付き語彙リスト」を作成すれば、学習者が自分で予習することができますし、単語を覚えるときの手助けにもなります。

教室活動に必要な副教材を作る

きょうしつかつどう ひつよう ぶくきょうざい つく

練習帳、教室活動集などの付属教材が付いていない教科書を使う場合は、教師がそれらを作ることが必要です。教室活動を考えるときに参考になる本の例を以下にあげます。

- 『日本語コミュニケーションゲーム80』（1993）The Japan Times
- 『クラス活動集 101 新日本語の基礎Ⅰ準拠』（1994）スリーエーネットワーク
- 『続クラス活動集 131 新日本語の基礎Ⅱ準拠』（1996）スリーエーネットワーク
- 『日英バイリンガルBITS and PIECES 日本語教材・アクティビティ集』（1997）講談社インターナショナル

以上を参考にしながら、いろいろ工夫してみてください。

担当：百瀬侑子（日本語国際センター専任講師）